

論文

スペインとラテンアメリカの「2つの出会い」をめぐって

— インディオの守護者たちとスペイン人亡命者 —

角田 哲康^{※1}

Discoveries/Encounters: Defenders of the 'Indians' and Twentieth Century Spanish Exiles in Latin America

Tetsuyasu SUMITA^{※1}

ABSTRACT

This article is in two parts. Each part describes what has been called a Discovery/Encounter. The first of these was Christopher Columbus's discovery of the New World in 1492. The first part of the article begins with this moment. It then goes on to discuss the so-called School of Salamanca, especially its guiding light, the Dominican Francisco de Vitoria, as well as Bartolome de las Casas, another remarkable Dominican friar. Both theologians were defenders of the American 'Indians' against the barbarities of the conquistadors. The second Discovery/Encounter is the experience of Spanish exiles in Latin America in the twentieth century. Between the outbreak of the Spanish Civil War in the summer of 1936 and the collapse of the Second Republic three years later, over half a million Spanish left the country. Exile was permanent for over 160,000 of those displaced. Among the exiles were a number of Spain's most prominent artists, poets, writers and philosophers, many of whom found refuge in Latin America. I discuss, in the second part of the article, the concept of exile that many of these displaced Spaniards lived by. I show how their thinking of exile diverged from the patial idea of *Hispanidad* promoted by Franco's regime to embrace concepts of synthesis among cultures in which notions of cultural uniformity are absent. I also show how their concept of exile was not to be Europeanized. Exile for them was rather a second discovery of and encounter with Latin America.

1. はじめに

1492年10月12日、クリストファー・コロンブス(1451頃-1506)がバハマ諸島グアナハニ島に到達した。コロンブスはこの島を、スペイン語で「聖なる救世主」を意味するサン・サルバドルと名付けた。「聖なる救世主」という命名が象徴するように、この歴史的出来事に対する肯定的な評価に対して、その後のコンキスタドルたちによる制服戦争やインディオを奴隷として強制労働させたエンコミエンダ制や分配制¹への批判も当然のことながら存在し、今日まで様々な視点からの議論が続いている。この流れは思わぬところにまで影響を与えた。アメリカ合衆

国において、イタリアのジェノバ出身とされるコロンブスはイタリア系移民からアメリカの歴史を創った英雄として評価される一方で、中米系移民からは征服者として非難されている。2017年1月にトランプ政権が誕生して以降、さらに顕著となっている白人至上主義者と人種差別反対派の対立が、同国内でのコロンブス像の破壊行為にまで及んだのである²。

かつて10月12日はDía de Hispanidad(スペイン精神文化の日)、Día de la Raza Española(スペイン民族の日)などと呼ばれ、地理的な拡がりと共に「伝統的なスペイン・カトリック精神文化」がラテンアメリカへと浸透し、2つの世界の一体感が高まったこと

※1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Professor, Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

を祝う日であった。スペイン内戦（1936-1939）に勝利したフランコ将軍（1892-1975）による独裁政権下では、このHispanidadが強く意識された。それは信仰心の篤いフランコが、2つに分裂し深く傷ついたスペインをカトリック精神のもとで再統一を企図したからであった。しかしフランコ没後の民主主義体制のもとで制定された「1978年憲法」では、Día de la Fiesta Nacional de España（スペインナショナルデー）と命名され、単にスペイン語圏が広がる契機となった日として祝われるようになった。コロンブスによる「新大陸発見」というスペイン側から見据えた垂直的理解から、「2つの世界の出会い」という水平的理解への転換を公式に表明したわけである。

先に触れたようにコロンブスによる「歴史的な新世界発見」という見立ては、征服戦争、奴隷問題など大きな犠牲をもたらし、その実態解明、批判的研究がなされてきている。その一方でイベリア半島とアメリカの間では、かつての征服者と征服された側が文化・政治・経済的に共存しようとする「イペロアメリカ」という今日的な新世界構築が進んでいる³のも事実であり、どちらの立場を重んじるかによって歴史的な評価は異なってくる。

そこで本論では、スペイン哲学、思想の視点に立ち、スペインとラテンアメリカの「2つの出会い」をめぐる知識人たちの思索活動について考察を行う。具体的には、1492年のコロンブスによる「最初の出会い」後のサラマンカ学派の思想家たちとラス・カサスの取り組み、それから5世紀ほど後の1936年に勃発したスペイン内戦をきっかけにラテンアメリカに亡命したスペイン人哲学者たちによる「第二の出会い」について潜思することにした。

2. 「最初の出会い」後のインディアス問題に対する思想的取り組み

2.1 フランシスコ・デ・ビトリアとサラマンカ学派

スペイン人コンキスタドールによる征服、侵略の問題は、インディアス問題と呼ばれる。インディアスとは、15世紀末から19世紀にかけてスペインが領有した北・中・南アメリカ大陸地域の名称であり、現在の西インド諸島とフィリピン諸島も含まれた。インディアスと複数形で表現されたのは、インド、中国、日本などの複数からなる地域とされていたからである。

インディアス問題に対しては、実のところ、どここの国よりも早くスペイン人自身が問題提起と告発を行ってきた。1511年12月21日、ドミニコ会修道士モ

ンテシーノス（1475-1540）がエスパニョーラ島でコンキスタドールの残虐行為を批判した説教が、その始まりとされる。

この島の荒野におけるキリストの声、私がその声なのです。[・・・] さあ、皆さん、答えなさい、あなた方は一体いかなる権利、いかなる正当性をもって、このインディオたちをかくも惨めな、かくもおぞましい奴隷状態に所有しているのですか。それらの土地であなた方は前代未聞の殺戮と破壊を行い、無数の人々を消滅させてしまったではありませんか。一体いかなる理由で、あなた方は彼らをかくも抑圧し疲弊させ、食べ物も与えず、病気になっても治してやろうとしないのですか[・・・]。あなた方はインディオたちに信仰の何たるかを教え、彼らを創り給うた神の存在を知らせ、洗礼を受けさせ、ミサにあずからしめ、祝日と安息日を守らせるという義務を負いながら、その責任をどれほど感じているのですか。一体これらの人々は人間ではないというのですか⁴。

それまでになかった「信仰と統治の正当性」を問う厳しい説教は、コンキスタドールに大きな不安と動揺を与えた。インディアスの将来を左右しかねない事態と判断したフェルナンド2世（1452-1516）は、1512年「ブルゴス会議」を開き、王室諮問会議員、聖職者、神学者、法学者にインディアス問題について審議させた。これにより公布された「ブルゴス法」によって、征服前のインディオ社会における人権と所有権が認められることになった。しかしながら、征服後のスペインによるインディアス支配とキリスト教改宗の正当性、すなわちエンコミエンダ制と分配制の正当性について確認するものでもあった。

インディアス問題を「異なる共同体に属するインディオとの間の秩序形成をめぐる倫理的な問題」⁵として、思想的視点から取り組み始めたのはサラマンカ学派である。このサラマンカ学派を開いたのは、モンテシーノス神父と同じくドミニコ会修道士であるサラマンカ大学神学部第一講座教授フランシスコ・デ・ビトリア（1483?-1546）であった。ビトリアは1506年ドミニコ会に入会し、1508年ごろからパリのサン・ジャック学院で学び、1522年パリ大学において神学博士となった。その間、1512年にトマス・アクィナスの『神学大全』（第二―二部）、1520年に『説教集』、1521年にはアントニオ・デ・フィレンツェの

『道徳神学大全』の注釈書を出版した。中でもトミズムがビトリアの思想形成に与えた影響は大きく、自然的秩序（国家）と超自然的秩序（教会）の峻別、そして自然的秩序と権力意思の間の恒常的緊張の中で、平和は本質的にダイナミックなものとなるべきこと、さらには経済的な関係がそこに重要な要因として機能すること⁶を意識するようになり、後のインディアス問題における論理的展開に反映されることになる。

1526年から亡くなる1546年までビトリアが教鞭を取ったサラマンカ大学では、通常の講義とは別に特別講義を行うことが義務づけられており、1539年1月に「インディオについて」、6月には「戦争法について」と題する特別講義を行った。当時、サラマンカ大学神学部やドミニコ会のサラマンカにおける拠点であるサン・エステバン修道院には、インディアスの情報がいち早く届いていた。1533年にインカ帝国皇帝アタワルパ（1502?-1533）が、フランシスコ・ピサロによって処刑されたことは、当然のことながらビトリアの耳にも入っており、不正で卑劣な行為と非難していた。アタワルパ処刑の翌年、1534年11月8日付で友人のアルコス神父に宛てた書簡から、ビトリアの心情を読み取ることができる。

ペルーに関して尊師に率直に申し上げるなら、〔・・・〕もはや小生のところに届く情報が小生を驚かすことも当惑させることもありません。しかし聖職禄にまつわるいかさまやインディアス問題だけは別で、小生はそれらを耳にするだけで身体中の血が凍る思いがします。

〔・・・〕小生はあの戦争の正義とやらが理解できないのです。〔・・・〕アタワルパもまた彼の部下たちも、キリスト教徒に対してなんの損害も与えず、またそれを理由に戦争を起こすべきいかなる行為にも及ばなかったということです。

〔・・・〕その事件以降今日までのさらなる征服事業は、ただただ卑劣きわまるものであると思います⁷。

インディアスにおける征服戦争は、エルナン・コルテス（1485-1547）がアステカ帝国を征服した1519年から大規模化する。それまでスペイン人コンキスタドールは、まとまった数の労働力の調達、貴金属の獲得とキリスト教布教の成功が約束されるような高度なインディアス文化とは接していなかった。ア

ステカ帝国征服の知らせにスペイン人コンキスタドールは熱狂し魅了され、さらに膨大な費用を必要とする大規模かつ残虐な征服事業へと駆り立てられるのである⁸。

コルテスは2年間サラマンカ大学で法学を学んだが、1504年、道半ばでインディアスに渡った。ドミニコ会の思想的影響が強いサラマンカ大学で学んだ経歴が、当初インディアスにおいて公証人などの仕事で身を立てることに役立ち、皮肉なことにコンキスタドールへと繋がることになったのである。尚、ピサロはコルテスの遠縁にあたる。

「降伏勧告状」も、征服戦争を正当化する理由付けとなっていた。この降伏勧告状は、先に述べた1512年の「ブルゴス法」を受け1513年に編纂された。インディオを前にして読み上げられたその内容は、1493年にローマ教皇アレクサンデル6世が発布した「贈与大教書」によって、スペインにインディアスにおける一切の支配権が与えられたとして、インディアスの支配者としてのスペイン国王への服従を説き、インディオが拒否した場合は、彼らの財産、土地だけでなく命さえも奪うことが出来るとするものであった。しかし現実には、スペイン語が理解できないインディオに一方的に読み上げるだけで、たとえ通訳が同行していた場合でも内容を理解させる時間すら与えられていなかった。そしてコンキスタドール自身もその内容を十分に理解できてはいなかった⁹。いずれにせよ、降伏勧告状を受け入れても拒絶しても、奴隷化と虐待が待ち受けていることに変わりはないのであった。

ビトリアが1539年の2つの特別講義に至るまでには、1533年のアタワルパ処刑に先がけて、このような憂慮すべき前段があったのである。ビトリアは1528年に「政治権力について」、1533年、1534年には「教会の権限について」の特別講義を開く。非キリスト教世界における政治権力と教会権力の効力の検討¹⁰をまず行うことで、インディアス問題の核心に近づいていったのである。そして1539年の「インディオについて」では、先に指摘したトミズムの影響、パリで注釈書を著した『神学大全』における理性と所有権の概念がさらにはっきりと象られ、信仰と所有権の正当性について指摘するに至る。

聖トマスの次のような論証もある。信仰は自然法上の権利や人定法上の権利を取り上げることはしない。ところで、所有権は自然法にも人定法にも属する権利である。ゆえに信仰の欠如

を理由に所有権が失われることはない。〔・・・〕彼らがキリスト教徒でないという理由だけでその所有する物を奪うことは許されないということである。もし彼らから奪うなら、キリスト教徒に対して行った場合と同じく、盗みであり略奪である¹¹。

〔・・・〕インディオは不信仰の罪によっても他の大罪によっても、真の所有者あるいは主人であることを公的にも私的にも妨げられるものではないということ、そしてキリスト教徒たちも前述のような名目（不信仰であるという名目）をもってインディオから財産を取り上げることはできない、ということである。このことはカエタヌスがトマスの『神学大全』、第二・二部に関する註釈で雄弁かつ広範囲に論じているとおりである¹²。

〔・・・〕インディオはキリスト教徒と同じく、公的にも私的にも疑いもなく真の所有者であり、まさにその理由から、インディアスに住む個々人も君主たちも、あたかも真の所有者ではないかのようにその所有物を奪われてはならない¹³。

この当時、金や銀によってスペインの国家財政を支えるようになったインディアスは、「海の彼方に位置するもう1つの王国」という理想から宗主国スペインの財政を支える「植民地」にその存在意義が大きく変わっていた¹⁴。これとともに「新大陸の発見自体はすでに問題ではなく、発見自体は是とした上で、征服戦争の正当性が神学者や哲学者の研究対象」¹⁵となっていたのである。この論壇になると、征服されるのは「インディオが野蛮であり、理性的な存在ではない」からとする、いわゆる理性問題が主題となった。ビトリアたちサラマンカ学派も、教育が不十分であるインディオの劣等性については認める立場であったが、自然法の立場からあくまでも所有権を持つ人として見なし、非理性的存在とはしていない。非理性的で知性を欠く存在であったならば、コンキスタドールが滅ぼすべき存在とした「高度な文明と体系化された社会構造を持つインカ帝国やアステカ帝国」の存在自体が矛盾することになるからである。

この論題（所有権）は、聖トマスの権威によっても確認される〔・・・〕。彼は理性的な被造物だけがおのれの行為に対する主権（所有権）を

持っている、なぜなら「あれかこれかを選択することができる」とき、ひとはおのれの行為の主である」〔・・・〕からである¹⁶。

〔・・・〕現実に彼ら（インディオ）は精神的無能力者ではないし、むしろ彼らなりに理性を行使しているからだ。彼らは自分たちのことに関して、なんらかの秩序を保っていることは明らかである。つまり彼らはしかるべく統治された都市、はっきりとした結婚制度、行政組織、主君、法律、専門的な職人、交換経済などを有しており、これらはすべて理性の行使を必要とする。さらに彼らが、一種の宗教を持ち、他の人間にとっても明白なことがらに関して誤ることがないことも、彼らが理性を行使していることを示している。神と自然は、人類の大多数の者に不可欠なことがらにおいて彼らを見捨てることはないのだ。そして人間にとってもっとも重要なものは理性であり、行為に還元されないような潜在能力は無用のものである。もしかすると彼らは何千年ものあいだ救いの状態の圏外に置かれていたかも知れないが、しかしそれは彼らの責任ではない。なぜなら、彼らは罪の中に生まれ、洗礼を受けられず、救いに必要なことを求めるために理性を行使する機会に恵まなかったと言えるからである。それゆえ私は、彼らがたいへん愚かで鈍感な者たちに見えるという事実は、その大部分が彼らの俗悪で野蛮な教育から来ていると考える。というのは、私たちの場合であっても、田舎の人たちの多くは動物とほとんど変わらないことを知っているからである¹⁷。

〔・・・〕インディオたちがたと言われているように役立たずで野蛮であったとしても、だからと言って彼らに真の所有権があることを否定すべきではないし、市民法で言う奴隷のカテゴリーに属させるべきでもない¹⁸。

ビトリアが特別講義において、「贈与大教書」によるインディアスの支配権の正当性について法的疑義を呈し、インディオを自然奴隷とする根拠を否定したことの意義は大きい。さらに、野蛮的存在と理性的存在の線引きにキリスト教徒であるかどうかという宗教的要素を取り除き、「不十分な教育制度に起因する教養の差」という視点を取り入れた¹⁹ことも注目し得る。

ビトリアがサラマンカ大学で行ったとされる十数

回の特別講義には学生だけではなく、フランシスコ・ザビエルの従兄弟でポルトガル・コインブラ大学の総長となるマルティン・デ・アスピルクエタ（1492-1586）、フランシスコ・デ・ビトリアと共に「サラマンカ学派」を導き、「ソトを知る者はすべてを知る」と称えられたドミンゴ・デ・ソト（1494-1560）、このソトとともにトレント公会議に神学顧問として参加したメルチョル・カノ（1509-1560）などそうそうたる識者が出席していた²⁰。大きな波紋を呼んだビトリアの特別講義は、ビトリアを信認していたスペイン王室の政治方針にも影響を与えることになった。それはビトリアの「知性が〔・・・〕時代の要請に鋭く反応するものであったこと、もっと具体的に言うなら、キリスト教ヨーロッパの解体、新世界発見、そしてスペインの社会的不安定という巨大な地殻変動に遭遇することによって彼の神学が社会倫理、政治哲学へと大きく発展し〔・・・〕国際法の理論的骨格を作った」²¹からであり、インディオというヨーロッパ・キリスト教世界の外の人の立場に立った法制定の可能性を示すものだったからである。

ビトリアとサラマンカ学派によるインディアス問題に関する研究は、次世代のフランシスコ・スアレス（1548-1617）、フーゴー・グロティウス（1583-1645）たちによる国際法研究²²への道を開く契機ともなり、ビトリアは「国際法の父」と呼ばれるに至った。

2.2 ラス・カサス —インディオの守護者—

今日「インディオの守護者」と称えられるバルトロメ・デ・ラス・カサス（1484-1566）も、インディアスの征服戦争の正当性を否定し、インディオの人権問題について告発を行ったスペイン人である。ラス・カサスの父ペドロロ・デ・ラス・カサス（1464?-?）はコロンブスと親交があり、1493年のコロンブス第2回航海に参加している。6年後に帰国した父が奴隷として連れ帰ったインディオを息子ラス・カサスに与えことが、将来のラス・カサスのインディオに対する愛情に影響した可能性もある。サラマンカ大学で学んだ後、ラス・カサスは1502年の第4回航海で、ニコラス・デ・オバンダとともにコンキスタドールの一員としてエスパニョーラ島に渡った。1506年に一端帰国し、故郷セビージャで副助祭となった後、ローマで司祭に叙階され、再びエスパニョーラ島に渡っている²³。

当初ラス・カサスはインディアスにおける分配制に基づきエンコメンデロとしてインディオを所有し、

開拓事業に従事していた。その一方で、従軍司祭としてコンキスタドールに説教を行い、彼らから告解を受け、罪の許しの秘蹟を行っていた。先に触れた1511年のモンテシーノス神父の説教の後、1512年ラス・カサス自身がエスパニョーラ島でモンテシーノス神父に告解しようとした。しかしラス・カサスがインディオ奴隷とエンコメンダ制に関わっていることから、告解を拒否されている²⁴。

その後、キューバ島の征服戦争と植民活動に加わり、1513年のパンフィロ・デ・ナルバエス（1470-1528）によるカナオカ村での3000人ものインディオ大虐殺をはじめ、数多くの虐殺を目の当たりにした。ラス・カサスは、揺れ動く心を次のように綴っている。

この島に住んでいたインディオたちは、エスパニョーラ島のインディオたちと同じように、全員奴隷にされ、数々の災禍を蒙った。仲間たちがなす術なく死んだり、殺されたりするのを目にして、他のインディオたちは山へ逃げたり、絶望の余りみずから首をくくって命を断ったりしはじめた。こうして、数組の夫婦が首をくくり自殺したが、彼らは自分の子供達を道連れにした。（私が知っている）あるひとりの、とりわけその虐待ぶりにかけては札付きのスペイン人のために、200人以上のインディオが首をくくって自殺した。このようにして、数えきれないほどの人たちが帰らぬ人となった。

〔・・・〕その後、キリスト教徒たちは山中に身をひそめたインディオたちを狩り出しにいくことになった。彼らは甚だしい害をインディオたちに加え、結局、キューバ島を荒廃させ、全滅させてしまった。われわれが最後にその島を見てから余り月日はたっていないが、荒れはててひっそりと静まりかえった島を見ると、非常に胸が痛み、深い同情の念がこみ上げてくるのである²⁵。

この結果、1514年8月15日、聖母の被昇天の祝日の説教において、託されていた自身のインディオの解放宣言とエンコメンダ制に対する厳しい批判を行い、インディオ救済の活動に転じた。これがラス・カサスの「第一回目の回心」である。

ラス・カサスはモンテシーノス神父が属するドミニコ会と連携し、インディアス総督、エンコメンデロ、コンキスタドールにインディオ救済を強く訴え

たが理解は得られず、逆に彼らの反動は大きくなるばかりだった。一修道士の立場で国策に関わる問題を解決することの限界を思い知らされたラス・カサスは、フェルナンド2世に直接訴えることを決意した。そして1515年9月モンテシーノス神父とともにスペインに帰国する。

これ以降1566年天に召されるまでの51年間にわたり、ラス・カサスはインディオ救済を3人のスペイン国王、フェルナンド2世、カルロス1世（1500-1558）そしてフェリペ2世（1527-1598）に訴え続け、実に7度も大西洋を渡った。1516年、摂政でありトレド大司教であったフランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロ（1436-1517）にスペイン人農民のインディアスへの植民計画を含む『十四の改善策』、1518年にはインディアス会議にインディオの代わりとなる黒人奴隷の導入案などを含む『島嶼部とティエラ・フィルメ（現在のベネズエラ、コロンビア、パナマ）の改革に必要な改善策に関する覚書』を提出し、徐々に王室内でのプレゼンスが高まっていった。そして1520年、カルロス1世はスペイン人農民の植民計画を許可した。しかしインディアスにおいてスペイン人、インディオ双方から十分な理解は得られず、悲劇は繰り返された。自らの命も危うくなるほどの混乱を收拾するため、ラス・カサスは友好的ではないと判断されたインディオの奴隷化をエンコメンデロに認めざるを得なくなり、平和的植民計画は挫折した。

この失敗を「神の裁き」と感じたラス・カサスは、政治的妥協を排除し、純粋に司祭の立場から改革を進めるため、ドミニコ会への入会を決意した。これが1522年9月の「第二回目の回心」である。この「第二回目の回心」から1526年9月までの4年間、ラス・カサスはドミニコ会修道会で修道生活を送りながら、神学研究に没頭した。ラス・カサスに大きな影響を与えたのは、ビトリアと同じくトマス・アキナスの『神学大全』であった。「第二回目の回心」は、「ラス・カサスを神学、法学理論で身を固めたインディオの使徒へ大きく変貌させる重要な契機」²⁶となったのである。

1540年、20年ぶりにラス・カサスはスペインに帰国した。1542年4月ラス・カサスはカルロス1世に謁見し、エンコミエンダ制廃止、インディオ奴隷解放、奴隷制度廃止などを盛り込んだ『改善策に関する覚書』を提出した。この時の報告が基となり、後に主著『インディアスの破壊についての簡潔な報告』（1552）が出版されることになる。

カルロス1世はこの報告に基づき、翌5月にバリャドリッドでインディアス問題を論ずる特別審議会を開催し、ラス・カサスは報告書を読み上げた。審議会はバルセロナに場を移して続けられ、11月20日に「インディアス新法」が制定された。ラス・カサスの要求がすべて取り入れられたわけではないものの、「新規のインディオ奴隷を認めない」、「副王、総督、聖職者、官僚によるエンコミエンダの廃止」などが盛り込まれた40箇条から成る画期的な内容であった。

1544年、メキシコ南部チャパス司教に任じられたラス・カサスは、「インディアス新法」による改革を期してスペインを離れた。しかし「インディアス新法」は自分たちの財産を奪うことになるかと困惑したインディアスのスペイン人たちから、ラス・カサスは新法成立の首謀者として目の敵にされ、「インディアス新法」の実施は困難を極めた。その上インディアスから「インディアス新法」の撤回を求める書簡が王室に届くようになった。カルロス1世とフェリペ皇太子に現状報告し問題解決を図るため、ラス・カサスは1547年3月、スペインに向けて最後の大西洋横断に臨んだ。

そのラス・カサスを待ち受けていたのは、当時最も優れたアリストテレス哲学研究者とされたフアン・ヒネス・デ・セプルベダ（1489-1573）だった。1510年シスネロスが創設したアルカラ・デ・エナレス大学で哲学と倫理学を学び、1515年からイタリア・ボローニャで神学、さらにアリストテレス哲学研究に邁進した。1523年神学博士号を取得すると、ローマ教皇庁の翻訳官としてアリストテレス作品のラテン語への翻訳に取り組み始めた。1536年、カルロス1世の勅撰史官となったセプルベダは21年ぶりにスペインに帰国し、王室のあるバリャドリッドに居するようになった。1542年からは、バリャドリッド生まれのフェリペ皇太子の私教師も務めている。

1545年、セプルベダは『第二のデモクラス。インディオに対する戦争の正当原因を巡る対話』を執筆した。セプルベダはアリストテレスの「先天的奴隷説」に基づきインディオを自然奴隷化するのは正当であり、さらに間接的権力論に基づいたアレクサンデル6世の「贈与大教書」によって、征服戦争も正当であると主張し、ラス・カサスに論理的に反論したのである。セプルベダは、1533年にオスマン帝国との戦争を正当化するため『第一のデモクラス。戦争とキリスト教の両立に関する対話』を著しており、デモクラスとレオポルドの対話形式を用いた論理展開は、以下に見られるように、『第二のデモクラス』

にも活かされている。

に認められている行為であることを理解したのです²⁷。

レオポルド 〔・・・〕悪人には戦争を仕掛けるよりも、彼らの不正行為を黙認し、諦めてその害を耐え忍び、習慣や人定の法よりも、神の法、すなわち、キリストが私たちに、敵をも愛し、彼らの中傷や迫害にじっと耐え忍びなさいと命じられた福音の掟を優先させる方がはるかに正しく、また、キリスト教の慈愛に合致するものではありませんか。

デモクラテス あなたはまた、そのような馬鹿げたことを言うのですか。レオポルドさん、先ほどもあなたに言ったように、私たちは以前ヴァチカンで、軍事の公明正大さに関して、すいふんと時間をかけて話し合ったわけですが、それも骨折り損に終わったようです。なぜなら、あの時、私は、戦争を行うことが福音の掟に背かない場合がひとつならずあることを明らかにしたのですが、あなたを納得させられなかったからです。

レオポルド とんでもありません。ヴァチカンでの話し合いは有意義なものでした。あなたはあの三日間、宗教心やあらゆる種類の徳に関する多くの問題、とりわけ軍事に関わる問題をいろいろと博引旁証して論じました。それまで私は、同胞であるドイツ人の一部が新しく唱えた謬見にややかぶれていましたが、あなたのおかげで、キリスト教徒には戦争という戦争がことごとく禁止されているわけではなく、少なくとも不正を排除するための戦争は禁止されていないと考えるようになりました。つまり、〔・・・〕私は、それが自然法により万人

ソクラテスの問答法やプラトンの対話編を思わせる『第二のデモクラス』の出版申請は、出版を阻止しようとするラス・カサスと繋がり深いサラマンカ大学とアルカラ・デ・エナレス大学による審査によって、1548年に却下された。しかしその後もラス・カサスとセプルベダによるインディアスをめぐる論争は続き、大西洋を挟んだ2つの世界の人々を巻き込んだ大きな政治問題となった。その結果、1549年インディアス枢密会議は新たなインディアス征服事業の中止をカルロス1世に進言した。これを受けてカルロス1世は新規征服事業の許可を一時的に止め、1550年8月、新たな征服戦争の在り方とキリスト教への改宗方法について検討するため、バリャドリッド会議を招集した。ドミンゴ・デ・ソトが議長を務め、ラス・カサス、セプルベダの2人も招聘された。5日間に及ぶ2人の法学・神学論争は、今日「バリャドリッド論争」と呼ばれる。論争は過去の征服戦争と奴隷制度の正当性を問うことに終始したため、問題解決に向けた具体的な新案は採択されずに終わった。当時のカルロス1世は、ルターの宗教改革によって分裂したキリスト教世界の再構築、フランス王フランソワ1世とのイタリア戦争などのヨーロッパ内の問題にも対処しなければならず、時間的にも財政的にも厳しい状況にあった。またそのような局面を財政面で支えるインディアスからの要望を無視することもできない難しい立場でもあった。しかしながら、植民開始からさほど時を置かずに、国王主導による被征服者の人権をめぐる会議が、対立する双方の論策を公聴した上で、法学、神学そして哲学的見地から識者が検討する方法で開催された事例は、他のヨーロッパ諸国の植民地政策においても例はなく、歴史上におけるその意義は極めて大きい。

その一方で、ラス・カサスに対する評価は厳しいものとなっていく。インディアス征服を支持する本国、インディアス両方のスペイン人から「嘘つき」、「裏切り者」として蔑視された上、スペインと政治的に対立する国々、例えば、スペインからの独立を試みているネーデルランド、インディアスへの進出の機をうかがうフランス、スペインと海上覇権を競うイギリスによる反スペイン運動にもラス・カサスは利用された。スペインとの戦争に備え、国民の間に反スペインの感情を湧き上がらせるためにラス・カサスの『インディアスの破壊についての簡潔な報告』

が必要以上に誇張して取り上げられ、「スペイン人＝残虐行為を行う国民」としてのイメージが16世紀以降のヨーロッパに広く植えつけられた。こうした状況下、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』は、次々と各国で翻訳された。ネーデルランドで1578年にオランダ語版が最初に出版され、1706年までオランダ語版は実に26回も出版された。他にもフランス語版は1579年から1701年までに15回、英語版は1583年から1745年までに7回、ドイツ語版は1597年から1790年までに6回、イタリア語版は1598年から1730年までに6回、ラテン語版は1598年から1664年までに3回翻訳されているのである²⁸。各地でいわゆるプロパガンダが引き起こされた結果、スペインでは『インディアスの破壊についての簡潔な報告』の回収が命じられ、その後100年近く刊行されなかった。第二版が刊行されたのは、1646年バルセロナにおいてである。2017年10月に実施されたカタルーニャ州の独立住民投票以降、その動向が世界の注目を集めているが、この時も同じく独立問題が起きていた。そのため「スペイン人」*españoles*という単語が「カスティーリャ人」*castellanos*（カスティーリャ人。王室があるマドリッド、バリャドリッドはカスティーリャに在る）に書き換えられ、インディアスでの残虐行為への関与についてカタルーニャ人とカスティーリャ人の差別化が図られていた。この再刊後、異端審問書から禁書扱いされ、19世紀末まで刊行されることはなかった²⁹。

1804年の黒人主導によるハイチ独立以降、インディオの反乱に危機感を感じたスペイン系を中心とする植民地生まれのクリオーリョは、本国に代わって自分たちの支配権を確立するために独立運動を図った。この独立運動においても、ラス・カサスの『インディアスの破壊についての簡潔な報告』は、クリオーリョによって「残忍な本国スペインから独立する理由づけ」として使われた。

1820年代に多くのラテンアメリカ諸国が独立を果し、本国スペインにおいても1808年のナポレオンのスペイン介入とスペイン独立戦争、1823年の自由主義者によるスペイン立憲革命など、スペイン没落を象徴する政治的混迷が続いた。15世紀末のコロンブスの新大陸到達から17世紀にかけて栄華を極めた「太陽の沈むことのない大帝国」没落の一因となったラテンアメリカ諸国の独立は、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』が煽り立てた反スペイン運動に因るとスペイン伝統主義者は批判した。そしてこの反スペイン運動を「黒い伝説」と名付け、ラス・

カサスが引き起こした「途方もない妄想の産物」として厳しく断じた³⁰。この「黒い伝説」という言葉を決定的に知らしめたのは、フリアン・フデリアス（1877-1918）の『黒い伝説と歴史的真実 ―ヨーロッパにおけるスペイン』（1914）である。この著作がスペインのインディアスに対する歴史的貢献を誇示する一方で、「黒い伝説」には「スペイン人のキリスト教絶対主義と自民族中心主義、さらに言えば、ヨーロッパ中心主義が潜んでいる」³¹ことも忘れてはならない。

アメリコ・カストロ（1885-1972）は『歴史の中のスペイン キリスト教徒、イスラーム教徒、ユダヤ教徒』（1948）において、コロンブス、フランシスコ・デ・ビトリア、ラス・カサスがコンベルソ（ユダヤ教から改宗したキリスト教徒）の家系である可能性を指摘している。さらにカストロは、スペインにおける3つの血統、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラーム教から成る宗教文化の葛藤と共存が「スペインらしさ」を創り上げた³²とした。カストロによってコンベルソと目された思想家たちがインディアスとヨーロッパを葛藤と共存の中で思想的に結びつけ、人権確立に尽力したこともまた「スペインらしさ」のひとつと言えよう。

3. スペイン人亡命者と「第二の出会い」

1936年7月17日、人民戦線政府に対しスペイン領モロッコで軍事クーデターが起こった。クーデターを主導したフランコ将軍は数日間での勝利を信じていたが、武装化した社会労働党系の労働総同盟UGTとアナーキスト系の全国労働連合CNT等の激しい抵抗によってクーデターは失敗するとスペイン内戦へと発展し、1939年4月1日に終戦を迎えるまで3年近い時間が費やされた。第二次世界大戦直前である当時の政局から、多くの国を直接的、間接的に巻き込むことになり、国際的な内戦となった。イタリア、ドイツ、ポルトガルはフランコ軍を、ソビエト連邦とスペインから独立したメキシコが人民戦線を支持し、それぞれ多大な資金と軍事援助を行った。スペイン・カトリック教会は、フランコ支持を明らかにしている。

メキシコがスペイン内戦に介入し、人民戦線を支持した背景には、1910年から1920年までの10年間、国を二分して争ったメキシコ革命があった。スペイン内戦当時のラサロ・カルデナス（1895-1970）大統領は、保守派、富裕層、カトリック教会を中心とする右派と農民、労働者からなる左派との対立が依然

続く中で、農地改革とカトリック教会勢力一掃による社会構造の変革を進めており、スペイン内戦の状況をメキシコの現状に重ね合わせ、スペイン人民戦線との「精神的団結」をメキシコ社会に持ち込むことで難局を乗り切ろうとしていたのである³³。

内戦であれ征服戦争であれ、敗者は正義ではなく勝者の論に跪くことになる。「はじめに」で述べたように、フランコ將軍は分裂したスペイン“*Las Españas*”を伝統的なカトリック精神のもとでひとつのスペイン“*La España*”へと再統一しようとした。しかしながら、争いのきっかけとなる思想闘争を経て征服戦争に敗れた人たちが、思想統制に耐えることは難しい。結果5万人近い知識人たちが中南米諸国、とりわけ支援国であったメキシコ、さらにチリ、アルゼンチンへと亡命した³⁴。

斯くてホセ・オルテガ・イ・ガセット(1883-1955)をはじめ、オルテガが開いたマドリッド学派からホセ・ガオス(1900-1969)、ホアキン・シラウ(1895-1946)、ルイス・レカSENS(1903-1977)、マヌエル・グラネル(1906-1993)、フランシスコ・アヤラ(1906-2009)そしてマリア・サンプラーノ(1907-1991)、バルセロナ学派のエドゥアルド・ニコル、ホセ・フェラテル・モラ(1912-1991)、フアン・ガルシア・ダビッド・ガルシア・バッカ(1901-1992)さらに歴史家アメリコ・カストロたち多くが「思想的征服」から逃れ大西洋を渡った。

多くの哲学者がラテンアメリカを亡命先に選んだ理由については、アベジャン(1933-)の指摘がある。

南米諸国に多くのスペイン人哲学者が身を移したのは単なる偶然ではない。母語を維持し、この母語が日々のコミュニケーション媒体となる土地で暮らしたいとの必要性に駆られてのことである。この母語の必要性は哲学者にとって、他の職に従事する人たちよりも大きなものである。技術者とか科学者のことを指しているのではなく、詩人や作家たちと比べてのことである。[・・・] 詩人が自身の内部体験の世界に沈潜できることは疑う余地はないし、作家はおそらく想像の世界で生きていけるだろう。しかし哲学者が自分の著作にふさわしい創造的広がりを与えるためには母語環境が必要なのである³⁵。

哲学的であるにかかわらず、言語から独立して思考することは不可能である。「思考する」とこと

「あるひとつの言語を使う」ことは同義であるとも言える。そしてこの言語の問題は心理学的かつ社会的な問題でもある³⁶。多くの亡命哲学者にとって、スペイン語圏における知的活動、創作活動は、スペイン哲学の本質を保つために必要なことであった。

さらにスペインとラテンアメリカの間には、カトリックという共通点があった。ラテンアメリカ諸国のスペインからの独立、その後の革命、近代化にカトリック教会が果たした役割は大きく、精神的な支柱であった³⁷。

スペイン人亡命者たちの不安定な精神状況、言うならばトラウマは母国を離れて増し、精神的支えが必要になることは容易に想像できる。亡命哲学者のひとりであるマリア・サンプラーノの「自分の宗教や少なくとも宗教的傾向を理解しようとしているもうひとりの自分と向き合わなければ、取り組んでいる作品の本質に迫ることは難しい、いや不可能に近い」³⁸という言葉から、信仰が創作活動に大きな影響を与えていたことがうかがい知れる。

スペイン内戦によって新しい哲学的視野を持つ多くの哲学者がラテンアメリカに亡命した結果、スペイン本国では伝統哲学の研究者、すなわちスコラ哲学者が大学教授のポストを占めることになった。「スコラ哲学再興の時代」と呼ばれた1940年代以降、逆にスペイン哲学の近代化は遅れることになった³⁹。スコラ哲学の世界から適切な距離を取った亡命哲学者を待っていたのは、想像を超えた歓迎と共同研究環境だった。彼らの哲学的創造性とラテンアメリカ的要素が上手く均衡を保ちながら共存することによって、亡命先の研究者たちとのコラボレーションが進むことになったのである。この環境は、スペイン語、キリスト教に次ぐ大切な意味を持つことになった。

スペイン内戦中は人民戦線の兵士として戦ったフェラテル・モラは、内戦が終結するとパリ、キューバに滞在したが、チリの出版社クルス・デル・スルに招かれ、多くのチリ人研究者と学術交流した。1947年にグッゲンハイム研究奨励金を受けアメリカ合衆国に移り、1949年から亡くなるまでペンシルバニア州プリンマーカレッジでスペイン語と哲学の講座を担当し、哲学科の主任も長年務めた。彼の学術的貢献に対して、コロンビア国立大学、ウルグアイ中央大学、アルゼンチン国立トゥクマン大学、そしてスペイン・バルセロナ自治大学から名誉博士号が授与された。

自らのことを*filósofo exiliado*(亡命哲学者)ではなく*filósofo transterrado*(大陸を渡った哲学者)と呼

んだホセ・ガオスは、メキシコに渡るとすぐにスペイン協会の一員となった。この協会は1938年にラサロ・カルデナス大統領によって、スペイン内戦による亡命者を受け入れるために設立された。2万5千人近くのスペインから亡命者の中には、優秀な農民に加え、多くの知識人、例えば政府官僚、経済人、企業人、軍人、パイロット、大学教員などが含まれており、その受け皿となった。こうしてスペイン人亡命者は、メキシコ革命後のメキシコの発展に様々な分野において貢献したのである。1940年スペイン協会はコレヒオ・デ・メヒコ（メキシコ大学院大学）となり、今日に至るまでメキシコの中心的教育機関のひとつとして大きな功績を残している。ホセ・ガオスは、1938年の亡命直後からサン・ニコラス・デ・ヒダルゴ・ミチョオアカナ大学で、翌年から亡くなる1969年まではメキシコ国立自治大学で教鞭を取った。その間ハイデガーの『存在と時間』をはじめ、フッサール、フィヒテ、キルケゴールなど多くの現象学、実存主義の作品をスペイン語に翻訳し、次世代のスペイン語圏哲学研究者に大きな貢献をした。

1938年にメキシコに亡命したエドゥアルド・ニコルは、翌年からメキシコ国立自治大学哲文学部で研究を始め、博士号を取得した。その後哲文学部教授となり、50年以上にわたって研究と人材育成に貢献した。また同大学に哲学研究所も設立している。1940年にはメキシコ国籍を取得した。

フアン・ガルシア・ダビッド・ガルシア・バッカはバルセロナ大学で博士号を取得後、1936年にサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学の哲学講座教授職を得たが、フランコを厳しく批判して就任せずに亡命した。パリに滞在後、エクアドルに1939年から1942年まで亡命し、その後メキシコを経てベネズエラに亡命した。メキシコでは、ホセ・ガオスと同じくサン・ニコラス・デ・ヒダルゴ・ミチョオアカナ大学で講座を持った。ベネズエラに移ると、設立直後のベネズエラ中央大学哲文学部に身を置き、1971年まで教育と研究に従事した。その後学部長も務め、さらに哲学研究所を創設し、その初代所長となった。高等教育の普及にも尽力し1947年から1962年までの15年間、カラカス教育研究所でも教鞭を取り精力的に教育活動に従事した。

不幸な側面を持つ「最初の出会い」によってインディオに押しつけられたスペイン語とキリスト教が、幾世紀もの時を経て、希望を失ったスペイン人亡命者に新たな活力を与えることになった。スペイン語とキリスト教。これらはラテンアメリカが苦しみな

がら保持し、発展もさせたスペイン的要素である。そして新たに大西洋を渡ってきたスペイン人を迎え入れた環境。ラテンアメリカをめぐるこれらの歴史的な循環は、スペイン人亡命者たちにとって「新たな発見」であり、ラテンアメリカとの「第二の出会い」であった。そしてHispanidad franquista（フランコ將軍による伝統的なスペイン精神に基づく統一）やProlongación de Europa（ヨーロッパ文化の延長）ではなく、ラテンアメリカが育んできた独自の文化として評価する機会ともなったのである。

4. おわりに ―接ぎ木としてのスペイン哲学―

歴史的かつ社会学的な視点からすると、スペイン内戦が起きたスペイン20世紀は亡命の時代であったと言えることができる⁴⁰。この亡命に対する歴史的な意識は、ラテンアメリカ諸国においても存在している。先に述べたラス・カサスにまつわる「黒い伝説」は、19世紀のラテンアメリカ独立運動が始まると今度は「白い伝説」と化した。独立したものの政治情勢が安定せず、経済的自立も思ったように進まない原因がインディオに向けられた結果、スペイン人コンキスタドールの征服事業は美化されるようになった。これが「白い伝説」であり、コンキスタドールの征服事業を阻止しようとしたラス・カサスは「先見の目が無かった」と非難されたのである。クリオーリョは自分たちの権益を守ることを、インディオ系の人たちは長きにわたるヨーロッパ支配による貧困からの解放を目指しており、必ずしも統一された政治思想で結ばれていたのではなかった。

このような背景のもと、フランコ独裁に反発してスペインを後にした亡命哲学者は、古いスペインの価値観を移入しようとしたのではなく、同じ言語で思考する環境の中で「スペイン的なこと」と「ラテンアメリカ的なこと」を繋ぐ役割を果たしたのである。

オルテガの高弟フリアン・マリアス（1914-2005）は、スペインとラテンアメリカを知的に結びつけるスペイン語を「接ぎ木」と呼んだ。スペイン人亡命者のラテンアメリカにおける哲学的貢献もまさしく「接ぎ木」と呼ぶに相応しい。オルテガ的な「生－理性」に満ちた接ぎ穂を新たな生を求める台木ラテンアメリカに接ぐことによって、生命力の高まった大木が育ち、「イベロアメリカ・ユマニスム」という果実が豊かに実った。

こうしてスペインは、スペインというひとつの国を超克する国々による共同体を築き上げたことによっ

てイスパノアメリカの国となり⁴¹、「理解し合える異文化」を内包する国となったのである。

主要参考文献

- 飯塚一郎、『大公開時代へのイベリア スペイン植民地主義の形成』、中央公論社、1981年。
- 小倉英敬、「スペイン内戦とメキシコ（カルデナス政権のスペイン人民戦線政府支援）」『人文学研究所報』（45）、神奈川大学人文学研究所、2011年、pp.45-61。
- 小田 英、「教皇の間接的権力論 スアレスを中心に」『早稲田政治公法研究』第97号、早稲田大学大学院政治学科研究科、2011年、pp.1-15。
- カサス、バルトロメ・デ・ラス、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』（染田秀藤訳）、岩波書店、1990年。
- 、『裁かれるコロンブス（インディアス史）』（長南実訳）、岩波書店、1992年。
- 、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』〔電子書籍版〕（染田秀藤訳）、岩波書店、2015年。
- 、『コロンブス航海誌』（林屋永吉訳）、岩波書店、1989年。
- カストロ、アメリコ、『スペイン人とは誰か その起源と実像』（本田誠二訳）、水声社、2012年。
- 笹川博一、『コロンブスは何を発見したか』、講談社、1992年。
- 佐々木孝、「ビトリアと「インディオについての特別講義」覚え書き」『東京純心女子短期大学紀要』第3号、1990年、pp.1-11。
- 角田哲康、「地中に花咲く都、コルドバ」『南スペイン・アンダルシアの風景』、丸善、2005年、pp.26-31。
- シュナイダー、ラインホルト、『カール五世の前に立つラス・カサス』（下村喜八訳）、未来社、1993年。
- セプールベダ、フアン・ヒネース・デ、『第二のデモクラス 戦争の正当原因についての対話』（染田秀藤訳）、岩波書店、2015年。
- 染田秀藤、「第二章 イベリアの足跡」『ラテンアメリカ世界 その歴史と文化』、世界思想社、1987年、pp.25-98。
- 、『ラス＝カサス』、清水書院、2016年。
- 谷川義美、『ラテンアメリカの福音宣布者たち —先住民への宣教活動—』、新世社、2008年。
- 中尾洋一、『「フランコ以降」のスペイン』、教育社、

1979年。

- 西山俊彦、「近代主義の成立と奴隷貿易—② 教皇文書と新大陸での実態の吟味 カトリック教会は奴隷貿易を容認したのではないか」『福音と社会』211号、2003年、pp.56-68。
- 原 稔、「ラテンアメリカの宗教変遷 グローバリゼーションによる40年間の宗教勢力変化」『東洋哲学研究所紀要』第22号、東洋哲学研究所、2006年、pp.59-80。
- ビトリア、フランシスコ・デ、『人類共通の法を求めて（「インディオについて」、「戦争の方について」、「インディアス問題に関してフランシスコ・デ・ビトリアがアルコス神父に宛てた書簡」）、岩波書店、1993年。
- 松森奈津子、『野蛮から秩序へ インディアス問題とサラマンカ学派』、名古屋大学出版会、2009年。
- Abellán, José Luis, *Filosofía Española en América (1936-1966)*, Ediciones Guadarrama con Seminarios y Ediciones, 1967。
- , *Panorama de la filosofía Española actual —una situación escandalosa—*, Espasa — Calpe, 1978。
- , *El reto europeo: identidades culturales en el cambio de siglo*, Editorial Trotta, 1994。
- , *Historia del pensamiento español: de Séneca a nuestros días*, Espasa — Calpe, 1996。
- , *El exilio filosófico en América: Los transterrados de 1939*, Fondo de Cultura Económica, 1998。
- , *El exilio como constant y como categoría*, Biblioteca Nueva, 2001。
- Abellán, José Luis y Monclús, Antonio (Coords.), *El pensamiento español contemporáneo y la idea de América, I. El pensamiento en España desde 1939*, Anthropos, 1989。
- , *El pensamiento español contemporáneo y la idea de América, II. El pensamiento en el exilio*, Anthropos, 1989。
- Abellán, José Luis y Apaolaza, et al., *Memoria del exilio vasco: Cultura, pensamiento y literature de los escritores trasterrados en 1939*, Biblioteca Nueva, 2000。
- Balibrea, Mari Paz, *Tiempo de exilio: una Mirada crítica a la modernidad Española desde el pensamiento republicano en el exilio*, Montesinos, 2007。
- Bolado, Gerardo, *Transición y recepción La filosofía Española en el ultimo tercio del siglo XX*, Sociedad Ménendez Pelayo, Centro Asociado a la UNED en Cantabria, 2001。

Bueno, Gustavo, *España frente a Europa*, Alba Editorial, 2000.

Castro, Américo, *España en su historia: Cristianos, Moros y Judíos*, Editoria Crítica, 1984.

Cuevas, Cristóbal, *Fray Luis de León y la escuela salmantina*, Taurus, 1986.

Eduardo, Nicol, *El problema de la filosofía hispánica*, Fondo de Cultura Económica, 1998.

Ferrater Mora, José, *Cambio de marcha en filosofía*, Alianza, 1974.

———, *La filosofía actual*, Alianza Editorial, 1986.

Gaos, José, *Obras Completas*, vol.XVII, UNAM, 1982.

García García, Emilio, ‘Bartolomé de Las Casas y los derechos humanos’ en “Los derechos humanos en su origen. La República Dominicana y Antón de Montesinos”, Editorial San Esteban, 2011, pp.81-114.

Gómez-Muller, Alfredo, *Alteridad y ética desde el descubrimiento de América*, Ediciones Akal, 1997.

González, Pilar, ‘El sentir chileno de Leopoldo Castedo’ en “El pensamiento español contemporáneo y la idea de América”, Volumen II, Anthroos, 1989.

Heredia Soriano, Antonio (Ed.), *Exilios filosóficos de España*, Ediciones Universidad de Salamanca, 1995.

———, *Mundo hispánico-Nuevo Mundo: visión filosófica*, Ediciones Universidad de Salamanca, 1995.

Llera, Luis de, *Filosofía en el exilio: España redescubre América*, Ediciones Encuentro, 2004.

Maestre, Agapito, *Meditaciones de Hispano-América*, tecnos, 2001.

Mariás, Julián, *Obras VII*, Revista de Occidente, 1966.

———, *Filosofía Española actual Unamuno*, Ortega, Morente, Zubiri, Espasa - Calpe, 1973.

Morán, Gregorio, *El maestro en el erial - Ortega y Gasset y la cultura del franquismo -*, Tusquets, 1998.

Murillo, Ildefonso (Ed.), *El pensamiento hispánico en América: siglos XVI-XX*, Publicaciones Universidad Pontificia de Salamanca, 2007.

Ramón, Hernandez, *Fray Francisco de Vitoria, O.P. Síntesis de su vida y pensamiento*, Editorial OPE, 1983.

Rivera de Ventosa, Enrique, *España y América: Por un camino filosófico común*, Verlag de Augustinus, 1997.

Zambrano, María, ‘La religión poética de Unamuno’ en “España, sueño y verdad”, Siruela, 1994.

¹ 1493年にローマ教皇アレクサンデル6世（1431-1503）が發布した「贈与大教書」によって、スペインに新大陸における一切の支配権が永久に与えられた。この「贈与大教書」に基づき、1503年、イサベル1世（1451-1504）が、第3代エスパニョーラ島総司令官ニコラス・デ・オバンド（1460-1518）の要請によって認めたことから始まった制度。コンキスタドールたちの身分、功績に応じて、一定数のインディオを与え、彼らをキリスト教に改宗させることを委託すると同時に労働力としての使用を認めた。委託された人はエンコメンデロと呼ばれた。

1502年2月13日、ニコラス・デ・オバンドはそれまでの最大規模の入植者（約2500人）とインカ帝国を征服したフランシスコ・ピサロ（1478?-1541）を伴ってスペインを出航した。その中には、バルトロメ・デ・ラス・カサスも加わっていた。

² 2017年8月以降、テキサス州、メリーランド州などで、コロンブス像が破壊される等の被害が続いている。ニューヨーク・マンハッタンのコロンバスサークルにあるコロンブス像についても、撤去すべきとの議論が起こっている。

³ 1991年からイベロアメリカ首脳会議が毎年開催され、24のスペイン語圏の国と地域、2つのポルトガル語圏の国が参加し、文化、政治、経済分野における相互協力と理解を進めている。

スペイン語圏は、アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、エルサルバドル、キューバ、グアテマラ、コスタリカ、コロンビア、スペイン、チリ、ドミニカ、ニカラグア、パナマ、パラグアイ、ベネズエラ、ペルー、ボリビア、ホンジュラス、メキシコ。ポルトガル語圏は、ブラジル、ポルトガル。カタルーニャ語及びスペイン語圏としてアンドラが2004年に加盟した。

準加盟国としては、2001年にアメリカ合衆国自治連邦区であるプエルトリコ（スペイン語圏）、2009年にフィリピンと赤道ギニア（スペイン語圏）が参加している。

⁴ 染田秀藤、『ラス＝カサス』、p.25.

⁵ 松森奈津子、『野蛮から秩序へ インディアス問題とサラマンカ学派』、p.2.

⁶ 佐々木孝、「ビトリアと「インディオ」についての特別講義」覚え書き』、p.3.

⁷ フランシスコ・デ・ビトリア、「インディアス問題に関してフランシスコ・デ・ビトリアがアルコス

神父に宛てた書簡』『人類共通の方を求めて』（佐々木孝訳）、pp.225-227.

⁸ 染田秀藤、「第二章 イベリアの足跡」、『ラテンアメリカ世界 その歴史と文化』、p.27.

⁹ 1514年6月14日にカスティージャ・デ・オロ（現在のニカラグア、コスタリカ、パナマ、コロンビア北部）総督ペドロ・アリアス・ダビラ（1440-1531）が最初に降伏勧告状をインディオに読んだとされる。

西山俊彦、「近代主義の成立と奴隷貿易－② 教皇文書と新大陸での実態の吟味 カトリック教会は奴隷貿易を容認したのではないか」、2003, p.58.

¹⁰ 松森奈津子、前掲書、p.113.

¹¹ フランシスコ・デ・ビトリア（佐々木孝訳）、「インディオについて」、p.25.

¹² 同掲書、p.30.

¹³ 同掲書、p.35.

¹⁴ ラス・カサス（染田秀藤訳）、『インディアスの破壊についての簡潔な報告書』（電子書籍版）、No.3654.

¹⁵ José Luis Abellán, *Historia del pensamiento español de Séneca a nuestros días*, p.197.

¹⁶ フランシスコ・デ・ビトリア（佐々木孝訳）、「インディオについて」、p.32.

¹⁷ 同掲書、pp.34-35.

¹⁸ 同掲書、p.36.

¹⁹ 松森奈津子、前掲書、pp.131-132.

²⁰ 佐々木孝、「ビトリアと「インディオについての特別講義」覚え書き」、p.3.

²¹ 同掲書、pp.3-4.

²² グロティアスの主著『自由の海』（1609）、『戦争と平和の法』（1625）では、ビトリアについて計56回引用されており、その影響は顕著である。

飯塚一郎、『大公開時代へのイベリア スペイン植民地主義の形成』、p.1981.

²³ 叙階を受けた年については、1512年以降であり、司教アロンソ・マンソ（1460-1539）によって叙階されたとする説もある。アロンソ・マンソはインディアスに最初に派遣されたスペイン人司教である。

Emilio García García, *'Bartolomé de Las Casas y los derechos humanos'*, pp.81-114.

²⁴ 染田秀藤、『ラス＝カサス』、p.26.

²⁵ ラス・カサス（染田秀藤訳）、『インディアスの破

壊についての簡潔な報告』、pp.43-44.

²⁶ 染田秀藤、前掲書、p.54.

²⁷ セプールベダ（染田秀藤訳）、『第二のデモクラシー 戦争の不当原因についての対話』、pp.80-81.

²⁸ ラス・カサス（染田秀藤訳）、『インディアスの破壊についての簡潔な報告書』（電子書籍版）、No.4281.

²⁹ 同掲書、No.4221.

³⁰ 同掲書、No.4283.

³¹ 同掲書、No.4251.

³² 角田哲康、「地中に咲く都、コルドバ」、pp.28-29.

³³ この経緯については以下に詳しい。

小倉英敬、「スペイン内戦とメキシコ（カルデナス政権のスペイン人民戦線政府支援）」

³⁴ 知識人がラテンアメリカに亡命する傾向が強かったの対して、農民は南フランスに亡命する人が多かった。生産する農作物やワイン造りなど共通点が多く、新たな生活を構築しやすかったからである。スペイン内戦終結から半年ほどで第二次世界が勃発し、1940年にドイツがフランスに侵攻し始めると生活が困窮し、スペインに帰国する人たちも多く現れた。

³⁵ José Luis Abellán, *Panorama de la Filosofía Española Actual – una situación escandalosa-*, pp.117-118.

³⁶ José Ferrater Mora, *Cambio de marcha en filosofía*, p.67.

³⁷ 原 稔、「ラテンアメリカの宗教変遷 グローバリゼーションによる40年間の宗教勢力変化」、p.74.

ピラール・ゴンサーレスも、チリにおいてカトリック教会が民主主義体制への変革や人権擁護運動において大きな役割を果たしてきたことを指摘している。

Pilar González, *'El sentir chileno de Leopoldo Castedo' en "El pensamiento español contemporáneo y de la idea de América"*, Volumen II, p.616.

³⁸ María Zambrano, *'La religión poética de Unamuno' en "España, sueño y verdad"*, p.110.

³⁹ Gregorio Morán, *El maestro en el erial - Ortega y Gasset y la cultura del franquismo-*, p.411.

⁴⁰ José Luis Abellán, *'El exilio como categoría cultural: implicaciones filosóficas'* en *"Actas del V seminario de historia de la filosofía Española"*, Ediciones Universidad de Salamanca, p.3.

⁴¹ José Gaos, *Obras completas*, vol.XVII, p.247.